

## P-023

## 小学6年生は「子育て」についてどのように理解しているのか～医教連携による小・中学生に対する教育プログラム開発～

吉川はる奈<sup>1</sup>、是松 聖悟<sup>2</sup>、寺薊さおり<sup>1</sup>、細川江利子<sup>1</sup>、  
安藤 聡彦<sup>1</sup>、西尾 尚美<sup>1</sup>、関 由紀子<sup>1</sup>、齊藤 千景<sup>1</sup><sup>1</sup>埼玉大学<sup>2</sup>埼玉医科大学

## 【問題と目的】

ライフステージの変化やきょうだいの成長・発達を間近で見聞きする経験が少ない現代の子どもたちにとって、「子育て」は未知のものとされる。少子化の進行に歯止めがかからず、仲間とかかわる経験も十分でない状況も加わり、他者と協力し、育ちあう関係が結びにくい。小・中学生が生涯発達の視点から「育てること」について学ぶ授業を通じた教育プログラム開発をめざしている。中学生は、普通教科家庭科の中で幼児の発達の特徴や親と子、大人と子供との関わりについて学ぶ。しかし十分な時間はないこと、他者とかかわる、特に幼少の相手と関わるのが苦手であると指摘されている。そこで小学6年生、進級後の中学生を対象に、「子育て」についてどのように理解しているか質問紙から変化、特徴を把握する。教育プログラムの一環として行った小児科医による「親になることについての授業」に対する児童の反応（自由記述）については、是松らによる「医教連携による小中学生に対する親となるための「教育プログラム開発」の報告を参照。「育てられる」対象である小学校6年生には、「育てること」を理解することは難しいと思われるが、さまざまな形で、繰り返し積み重ねていくことで、理解を深める部分があるのではないかと思われる。今回は質問紙調査の基礎的な結果について報告し、小学6年生の「子育て」についての理解について示す。

## 【方法】

埼玉県内の小学校6年生2クラス65名を対象に、「育てること」についてどのように考えるか質問紙調査を行った。全28項目について、「とてもあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」から選択する方法で実施した。質問内容は、子どもに対する感情、子どもへの興味、自分に対する意識、子育ての参加意識、子ども理解などである。

## 【結果と考察】

小学6年生が、育てることについて、学ぶことは有用であるとうかがわれた。赤ちゃんの世話経験は52.3%であるが、幼児と遊ぶのは自分には難しいと回答する6年生は38%みられた。赤ちゃんの世話を協力して行う気持ちは97%とほとんどの子どもが回答するなどパートナーと協力して子育てすべきだと考えている。一方で泣き声にイライラすると回答するのは大人同様であった。小学生であっても、子どもへの興味、関心をもちながら、対応しようとする姿がみられ教育の重要性がうかがわれた。

## P-024

## 初めてベビーマッサージを実施した母親の気持ち

伊藤 良子<sup>1</sup>、日高 陵好<sup>2</sup>、加藤 裕子<sup>3</sup><sup>1</sup>和歌山県立医科大学 保健看護学部<sup>2</sup>国際医療福祉大学 福岡保健医療学部<sup>3</sup>県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科 看護学コース

## 【目的】

初めてベビーマッサージを継続して実施した母子に及ぼす影響を明らかにし、支援方法の一助とする。

## 【方法】

生後3か月の子どもの持つ11名の母親に、初めてのベビーマッサージを継続して1か月間実施してもらった後に、その母子への影響を明らかにするために半構造化面接を行った。方法は、ベビーマッサージの手技を説明した動画を自宅で視聴後、回数を定めず自由に行ってもらった。実施したベビーマッサージ回数は、ほぼ毎日2名、週に2～3回5名、週に1回2名、2週間に1回2名であった。面接調査のデータの中から、今回は母親の気持ちを抜き出し、コード化し、経時的に類似した内容をカテゴリ化して抽象度をあげる質的帰納的分析を行った。調査期間は2021年11月～2022年6月である。

## 【結果】

分析の結果、86のコードから、20個の＜サブカテゴリ＞、7個の【カテゴリ】に整理できた。ベビーマッサージを開始した最初から、【子どもが楽しんでいると感じる】母親がいた。一方で、半数の母親はベビーマッサージを【楽しむ余裕がない】と感じ、【母子ともに緊張してやりづらい】と思っていた。しかし、継続してベビーマッサージを実施した後は、どちらの母親も【母子ともに慣れて楽しめる】と気持ちに変化していた。また、ベビーマッサージを継続することで【子どもの気持ちがわかる】ようになっている自分に気づいていた。ベビーマッサージは、＜子どもと向き合う時間と感じる＞ようになり、【子どもとの大切な時間である】と認識するようになっていた。更に継続するために＜やりやすい方法＞や＜児の状況に応じた対応＞など【専門職からの助言が欲しい】と感じていた。

## 【考察】

初めてのベビーマッサージを行って、不慣れからやりにくさを感じる母親もある。しかし、継続すると、母親たちは子どもの気持ちに思いを馳せ、その時間が愛着を深める貴重な時間となっていくと考えられる。また専門家からの支援も求めていることも明らかになった。本研究の結果から自宅でのマッサージを支援するには、最初はやりづらくても、母子共に楽しめる時間に変わっていくこと、また、ちょっとした工夫や方法を記した資料を渡すこと、必要によっては相談できるメール等の連絡先をつけること等で、母親が安心してベビーマッサージを続けることにつながるだろう。